

〈翻訳〉

ユンカー・フォン・ランゲック著

『瑞穂草，第二部，雑学の部』より

第1章 日本の文学 言語の構造ならびに日本人の文学と詩歌(3)

熊谷知実

5. 日本人の文学と詩

仏教伝来をきっかけに、学問と言語が中国から日本に伝わって、漢字の二重解釈にあたる〈よみ〉と〈こへ〉が生まれたことは、日本の文学すなわち〈学^{がく}〉に決定的な影響を与えた。純粹に〈よみ〉だけの表現，純粹に〈こへ〉だけの表現，さらに両者の混合表現という三種の文学表現が誕生したからである。

5-1. 国民文学としての〈和学〉

1) 〈よみ〉だけの表現とは，古代に端を発する純粹な〈大和言葉〉のことである。世俗文学や詩文学に，その用法が確認できる。例を挙げると，〈大和言葉〉は古い『源氏物語』や『伊勢物語』の中にも確認することができるし，国民的歴史書，国土地理学，祖国の文化や芸術や哲学に関する論文，古い時代の〈詩^{うた}〉にも使用されている。これらの文学作品はひっくり返して，日本文学を意味する〈和学^{わがく}〉という名称で呼ばれている。

5-2. 〈紫式部〉の『源氏物語』

最初の例に挙げた『源氏物語』(*)の作者は，日本海沿岸地域にある〈越前〉の〈大名〉の娘〈紫式部〉である。ある日，第六十二代〈帝〉の村上天皇(西暦947-967年，皇紀1607-1627年)の妻に仕えた女官が，伴侶を亡くした

皇太后のために新しい書物の出版を提案し、自ら執筆することを決意したという。⁽¹⁾学識者として名高い〈聖武〉⁽²⁾が、〈石山〉(**)の上に自ら建てた高い塔に籠って、古い中国古典著作集を起草していたとき、月夜の琵琶湖(***)の壮大な眺めに心を打たれたという話を、その女官はかつて聞いたことがあった。〈紫〉は同じ塔を訪れて、満月が壮麗な姿を湖面に映した一晩のうちに、『源氏物語』の最初の二巻を書き上げたという。五十四巻からなるこの作品を、〈紫〉は西暦988年(皇紀1648年)の数週間で完成させて、皇太后にそれを献上し、皇太后はそれを一条天皇(第六十六代帝、西暦987-1011年、皇紀1647-1671年)に献上した。この作品が〈源氏〉という名を持つ理由は、〈源〉^{みなもと}一族(漢字では、源氏)の歴史挿話を扱っているからである。この作品は今日なお古典文学の至宝とみなされ、後の長編小説の模範となっている。〈紫〉は西暦992年(皇紀1652年)に亡くなった。

(*) 〈ものがたり〉には、「物語」という意味と「物語る」という意味がある。

(**) 〈いしやま〉の〈いし〉とは「石」という意味、〈やま〉とは「山」という意味である。

(***) 〈琵琶湖〉または〈大津の海〉と表現する。〈おお〉は「大きい」という意味、〈つ〉は「港」という意味である。現在の〈滋賀〉にあたる〈近江〉地方には、日本最大の湖、琵琶湖がある。『大日本』を参照のこと。

5 - 3. 古典女流歌人による『伊勢物語』と『枕草子』、そして『平家物語』

次の例に挙げた『伊勢物語』^{いぜものがたり}は、『源氏物語』と同時代に、〈伊勢介〉^{いぜのすけ}または〈伊勢大輔〉^{いぜのたいゆ}⁽³⁾という女性にちなんで命名された作品である。〈帝〉の宮廷儀礼を司る官吏〈輔親〉^{すけいちか}⁽⁴⁾の娘によって執筆された。彼女は作家の中でも抜きん出た地位に就いている。⁽⁵⁾日本の文学と詩は、古くから女性の成功とともに育まれてきた。有名な『枕草子』(枕の本)⁽⁶⁾ (*)は、様々な内容を含む物語であり、数多くの詩をおさめた詩集でもあるが、この作品の作者もまた女性である。

純粋な〈大和言葉〉で書かれた古典作品としては、他に〈平^{たいら}〉一族の歴史を題材とした『平家物語』(**)がある。これは今もなお人気があり、一般に読まれ続けている作品のひとつである。

(*)『枕草子』の〈まくら〉とは、クッションの代わりに用いられた頭の支えのこと。〈しよし〉とは、「書くこと、書いたもの」という意味。〈しよ〉は「本」という意味であり、〈し〉は「する」という意味。

(**)『平家物語』の〈へいけ〉とは、かつて強い勢力をもっていたものの、源一族すなわち源氏に滅ぼされてしまった平一族の漢字名である。その合戦については、当該の記述を読んでいただきたい。〈平家〉と〈源氏〉は、漢字の呼称では短いために、歴史上はもっぱら〈タイラ〉と〈ミナモト〉という呼称で呼ばれていた。

5 - 4. 漢文学としての〈漢学〉、〈仏書〉、大衆向け作品の〈草双紙〉

2) 〈こへ〉だけの表現で書かれているのが、僧侶の宗教書にあたる〈仏書^{ぶつしよ}〉(*)である。この部門は、漢文学という意味で〈漢学〉と呼ばれているが、その文体はすでに用いられていない。文法用語の説明の多くが失われてしまい、文法規則の違反がしばしば登場する。

3) 〈こへ〉と〈よみ〉の混合表現に関しては、このどちらかが優勢になって現れる。〈こへ〉が使用語の大部分をしめる〈こへ〉の混合表現は、書簡や公文書、演説、学術論文、新聞において用いられている。〈こへ〉がわずかし使用語に現れない〈よみ〉の混合表現は、大衆の言語、日常生活の言語である。

日本の書籍目録において、文学は三つの階級に整理されている。〈和学〉、〈漢学〉、そして〈草学^{くさがく}〉または〈草双紙〉(**)である。〈和学〉は純粋な〈よみ〉作品であり、〈漢学〉は純粋な〈こへ〉作品である。〈草学〉または〈草双紙〉は混合表現で書かれた長編小説、短編小説、物語、童話であり、古い作品も新しい作品も含めて、書籍市場には常にたくさん出回っている。新しい娯楽文学作品はほぼ例外なく短命に消えてしまうのだが、

古典的国民英雄文学は数百年ものあいだ国民精神と密接に絡み合って、今日なお衰えることのない魅力を保ち、読者世界の芸術を支配している。もっとも何度も翻訳されている西洋の研究書や通俗科学書、新しいことには何にでも好奇心旺盛に食いつく日本人が扱う現代の日常問題に関しては、この事情は異なっている。

(*) 〈仏書〉の〈ぶつ〉は、「仏陀」という意味、〈書〉は「本」という意味である。

(**) 〈和学〉の〈わ〉は、「日本」を指す漢字であり、〈がく〉は「学問」という意味。〈草学〉と〈草双紙〉の〈くさ〉は、日本語では〈そう〉と発音されて、その漢字は「草」を意味する。上記の作品が執筆される漢字の現行の書体は、通常は「草」書体である。または混合しているものを指すこともある。それゆえにこの語は、様々な内容を含む本の書名に選ばれることがよくある。例えば、この作品の総合タイトルを『瑞穂草』としたように。

6. 世俗文学の〈外伝〉、長編小説の〈草紙〉と〈物語〉、法律文書、書簡

世俗文学は、〈^{げでん}外伝〉または〈俗臭〉(*)と呼ばれていて、漢語および日本語の韻文と散文を包括している。〈外伝〉は、修行僧の生活や、民衆の行動、習俗習慣を取り扱うあらゆる書の仏教的名称であって、仏教徒のバイブルかつ正典にあたる〈経〉とは異なるものである。〈経〉に数えられる中国の古典作品は他にもあるが、「中国五大古典作品の四冊」と呼ばれる選集〈四書五経〉(***)⁽⁷⁾が、第一に挙げられるだろう。

日本の〈外伝〉は、文の様々な特徴を持つ用法、不変変化詞の様々な用法によって区別されている。〈外伝〉には、特別な文体を持った様々な作品部門があり、散文も韻文も含まれているのである。たとえば：

1) 〈草紙〉(***)と〈物語〉、これは著名人の人生と歴史、祖国の重

要な出来事を題材とした説話である。その文体は、高貴な威厳と崇高さ、気品により際立っていて、様々な修辞表現や隠喩が好んで用いられている。筆者が第一巻で紹介した、退廃の忠誠物語『忠臣蔵』は、最も有名で愛されている〈草紙〉の一つである。

2) 法律, 風俗習慣ならびに通商取引の条例, そして

3) 書簡

書簡の文体〈文道^{ぶんどう}〉ないし〈文体〉(****)には、法律や条例の文章同様に、簡潔性と明確性、表現の明瞭性と確実性が求められなくてははいけない。

(*)〈俗臭〉は文字通りに「不快な臭い」を意味していて、教養のない卑しい人間に見られる外見、習慣、言葉のすべてを表している。「卑しく、不作法、無教養、洗練されない」という意味をもつ〈ぞく〉という語、そして「不快な臭いのする、臭い、腐った」という意味をもつ〈くさい〉という語が一緒になって成立している。

(**)『四書五経』はすべて漢語で、〈し〉は「四」という意味、〈しょ〉は「本、著作」という意味、〈ご〉は「五」という意味、〈きよ〉は「中国の古典」という意味である。

(***)〈草紙〉とは、「著作、書くこと」、文字通りに「本を作ること」。このうち〈しょ〉は「本、著作」という意味であり、〈し〉は「する、つくる」という意味である⁽⁸⁾。

(****)〈文道〉は漢語で、日本語では〈ふみのみち〉である。「文学、学識」を表す〈文〉は、日本語では〈ふみ〉といい、「手紙、著作、論文」という意味である。〈どう〉は漢語で、日本語では〈みち〉といい、「道路」を意味している。この表現には、両言語で同じ漢字があてがわれている。〈ぶんたい〉は「書簡のスタイル」という意味で、〈たい〉は「書き方、様式」という意味である。

6 - 1. 韻文作品の〈歌道〉、宮廷劇の〈能〉

4) 〈歌道^{かどう}〉(*)すなわち詩には、散文作品と韻文作品が含まれる。こ

れに相当するのが、〈能〉、〈浄瑠璃〉、〈謡^{うたい}〉であり、そして韻律をもった詩に相当するのが〈詩〉と〈歌〉である。舞台劇と喜劇もこれに相当しているのであるが、劇作品については、特別に設けられた章「日本人の芝居について」で詳細に語られることだろう。

〈能〉は、かつては宮廷でしか演じられることがなかった古い歴史劇であるが、それはすでに過去の話となっていて、近年では祝祭時に上演されるようになってきている。題材とされているのは〈源氏〉と〈平氏〉の合戦であり、その有名な作者は十五世紀中盤に生きた〈観世^{くわんぜい}〉である。きわめて厳肅かつ悠然と朗唱された声に、管弦楽団の伴奏が添えられて、ゆっくりとした拍子に合わせて役者(**)が動き、〈能〉を演じていく。

(*)〈歌道〉は、「詩作の規則」である。〈か〉は「詩」という意味で、〈どう〉は「道」という意味である。

(**)日本の舞台の上では、もっぱら男性だけが活動している。女性役は、女性の仮面をかぶった男性によって演じられている。

6 - 2. 伴奏のついた朗読劇の〈浄瑠璃〉

〈浄瑠璃〉(*)は、〈能〉と同様に、管弦楽団の伴奏をつけて演じられる悲劇のことである。厳密に言えば、古い時代の〈浄瑠璃〉しか、韻文作品には相当しない。新しい作品の大部分は、散文で書かれているからである。しかし新しい作品も、古い作品同様に、役者によって伴奏つきで演じられている。一定の場面に差し掛かると、管弦楽団の前唄を務める〈謡方^{うたいかた}〉(**)が、あたかも古代悲劇の合唱のように物語をつないで、筋の成り行きを妨げる。〈浄瑠璃〉という名称は、十六世紀後半に女流詩人〈小野阿通^{おののおつう}〉によって執筆された、この種の劇作品の最初の題材に由来するといわれている。その題材は、〈三州の柳橋^{きいち}の喜一⁽⁹⁾〉(***)の娘である〈浄瑠璃姫〉と、〈義経〉という名前で各方面に歌われた国民的英雄〈牛若丸〉の二人の愛の冒険である。後にこの英雄は、中国の説話で有名な〈チ

ンギスハン〉になった。さらに彼は、世襲幕府の創始者である〈源頼朝〉の弟でもあった。この空想的挿話は、西暦1177年(皇紀1837年)に舞台化されたという。〈浄瑠璃〉の漢字解釈としては、汚点のない淡緑色の陶磁器のつやを意味するものであり、悲劇の女神を隠喩している。

(*)〈浄瑠璃〉の〈じょう〉は、「純粋な、澄んだ、汚点のない」という意味で、この漢字は同義の「清い」という表現で書かれることもある。〈るり〉は「緑色の宝石」(エメラルドか?)という意味である。〈浄瑠璃〉は、現在では三本の弦楽器〈三味線〉の伴奏がついて、歌唱と暗唱の演奏と呼ばれることもある。

(**)日本の管弦楽団〈囃子〉は、通常は九人の奏者〈楽人〉で構成されている。すなわち、太鼓奏者〈太鼓方〉二名、横笛奏者〈笛方〉二名、葎笛奏者〈小簫築方〉二名、そして前唄者〈謡方〉一名である。このような九人編成の楽団のことを〈九人囃子〉という。それぞれの楽器奏者が一名になると、五人編成の〈五人囃子〉となる。楽曲を始めて、終わらせるのは〈鐘方〉の役割で、同様にして〈鐘方〉は楽章もまた始めて、終わらせる。そのあとに続いて、〈葎笛奏者〉が演奏に加わり、次に〈横笛奏者〉が、最後に〈太鼓奏者〉が加わる。このあとに〈鐘方〉と〈謡方〉を除いた全楽団が一斉に六重奏を奏でる。この間の演奏に、ときおり〈鐘型〉が入り込む。六重奏のあとには二重奏が続く。すなわちこの演奏会は、連続する楽章からなっており、そこに各楽器が先述の規則で入りこむことで、それぞれの楽章が完全に調和のとれた管弦楽団によって、数回の二重奏から全楽器の六重奏まで、〈鐘方〉と〈歌い方〉を除いて、続けられていくのである。〈五人囃子〉においては、楽団演奏のあとに独演奏が続く。さらに〈太鼓方〉と〈横笛方〉と〈葎笛方〉の三重奏が続くのである。

楽士を意味する〈楽人〉の〈がく〉は「音楽」という意味であり、〈にん〉は「人間」という意味である。〈太鼓方〉の〈たいこ〉は、「ドラム」という意味であり、〈がたり〉に由来する〈がた〉は、「話す、語る、唱える」という意味である。〈ふえ〉は「フルート」という意味。〈しょうしちく、しょうりきがた〉の〈しょうりき〉は「八本の葎笛からなる吹奏楽器」という意味で、この楽器を作る「一種の赤い竹」を指している。〈りき〉とは「力」という意味である。

(***)「王女」を意味する〈姫〉は、〈將軍〉の娘の肩書で、〈大名〉は〈將軍〉の下に封建的に仕える貴族のこと。そして〈公家〉とは〈帝〉の延臣のことで、天皇家の血を引いている。〈柳橋〉とは「柳の橋」という意味。〈やなぎ〉は「柳の木」(学名salix japonica)で、〈はし〉は「橋」という意味。〈三州〉は古い地方名を指しており、〈さん〉は数字の「三」という意味、〈しゅう〉は「行政区」という意味である。

7. 歌劇の〈謡〉

〈謡^{うたい}〉は、一定の拍子の音楽と歌が伴奏となって、独特の抑揚に合わせた旋律で演奏される戯曲形式の詩のことである。その台本には、声の抑揚である〈節^{ふし}〉、時おり挿入される管弦楽団の演奏、各楽器の伴奏が、一定の印または〈片仮名〉で書かれた注釈で提示されている。〈謡〉においては、歴史事件、有名な国民的英雄の人生の挿話、戦闘場面、神話的伝承、寓話が題材として扱われている。松の伝承⁽¹⁰⁾の『高砂^{たかさこ}」(*)を例に挙げると、〈かづみづよし⁽¹¹⁾〉の作品、著名な〈能〉作家〈観世^{くわんぜい}〉によって西暦1450年(皇紀2110年)に執筆された作品等がある。また他所で紹介するつもりであるが、『高砂』の歌詞は〈謡〉の中で最も有名であり、結婚式の歌、結婚祝言歌としてその一部が歌われている。『忠臣蔵』でこの詩の一節が歌われているのを、私たちは幾度となく耳にしてきた。

〈謡〉は、この国の歴史的意味と愛国心を民衆のうちに呼び起こすものとされている。〈草紙〉や〈物語〉と同様に、その文体は洗練され超越していて、絵と表現に富んでいる。韻律は、後に語られる〈歌連歌〉とほぼ同じである。〈謡〉は読み上げられるか、または舞台の上で演じられる。役者にとどまらず、高位身分の紳士もまたその正しい朗読術を入念に準備するが、〈大名〉が宮廷の上演に加わることさえあったという。あらゆる演劇の上演と同じように、〈謡〉における女性役もまた、役に応じた登場人物の仮面をつけた男性によって表現されている。また〈浄瑠璃〉と同様

に、管弦楽団が編成されている。

(*)「日本人の祭り：高砂」を参照のこと。

7-1. 漢詩としての〈詩〉、和歌としての〈歌〉

日本の韻律詩には〈詩〉と〈歌〉という二つの形式がある。その法則は、どの韻文作品においても重要である。

1) 〈詩〉は中国起源である。たとえ日本語の発音で妨害されていても、〈詩〉は抑揚も韻も漢詩の韻律に従っている。韻は漢〈詩〉の特性であり、中国文学の最古の詩においても韻を確認することができる。それに対して、形式も内容も漢詩を模倣した日本の〈詩〉からは、発音においても翻訳においても、漢語の韻文が〈読み〉に書き換えられたときに消えてしまった韻が、いまだ失われたままである。後の例で、このことを証明しよう。

7-2. 中国の〈詩〉と日本の〈詩〉

漢〈詩〉(「説教」を表す〈言〉というへんと、「仏教寺院」を表す^{てら}〈寺〉というつくりが合体した漢字)は、日本人が模倣した〈詩〉同様に、哲学的、教訓的、風刺的な内容の詩作品である。

漢詩の多くは五言か七言であるが、指導的観念を表現しようとするときには、四句か六句に分けられたり、四句か偶数句の連続する詩が形づくられたりする。句に分かれていない後者の詩の形式を^{ちようへん}〈長編〉(*)といい、これは不規則な詩である。〈長編〉と四句詩における一句目、二句目、四句目は、六句詩の六句目同様に、常に同じ尾韻を持ち、その韻は一定の法則に従って全体的に繰り返されるか、あるいは句ごとに(〈長編〉では四句ごとに)繰り返されていく。三句目と六句詩の五句目には、常に韻がない。例外として、二句目とそれ以降の句の一句目に韻がなくなることもある。だが最初の句の一句目は、二句目と四句目と常に同じ尾韻でなければいけない。〈詩〉はこの関連において、四句からなるペルシアの詩、ガゼ

ルとマカム⁽¹²⁾を彷彿させる。

1. _ _ _ _ _ ○
2. _ _ _ _ _ ○
3. _ _ _ _ _
4. _ _ _ _ _ ○

すでに言及したように、韻は日本語の性格に相容れないため、日本語の〈詩〉からは失われてしまった。次に紹介する〈頼山陽^{らいさんよう}〉の詩では、漢〈詩〉が〈読み〉に翻訳されて、いかに韻が失われていったのかが表現されている。⁽¹³⁾

漢文

1. 長風波浪一艦還
2. 碧海斜連赤馬關
3. 三十六灘行欲盡
4. 天邊始見鎮西山

読み

1. 長風波を破って一艦還る
2. 碧海斜めに連なる赤馬關
3. 三十六灘行くゆく土打と欲し
4. 天邊始めて見る鎮西山(**)

(*)〈長編〉の〈ちょう〉は「偶数」を意味する〈ぐう〉と同じ意味で、〈へん〉は「段落、本、製本された文書の一文」という意味である。

(**) 1) 〈ちょう〉は「長い、古い」という意味、〈ふう〉は「風」という意味、〈なみ〉は「波」という意味、〈を〉は主語を示す助詞、〈やぶて〉は「切断する、

引き裂く」を意味する〈やぶれ〉の過去分詞、〈いっかん〉は「船」という意味、文法的に正しい〈いつそうかん、いっそうかん〉という表現の代わりであり、〈いつ〉は「一」という意味、〈そう〉は船の数を数える数量詞、漢字の〈かん〉は日本語の「船」という意味、〈かえる〉は「帰還する」という意味である。

2) 〈へき〉は「碧緑」(古い古典的)という意味、〈かい〉は「海」という意味、〈ななめ〉は「斜面、横切って、対角の」という意味、〈に〉は「～で」という意味で、〈つらなる〉は「列に並んで、関連して」という意味である。〈あかまがせき〉(発音としては、あかまんが)は「見張り塔」のことで、〈赤間の関〉と言えば、内海の西の入口にある、今日では下関と呼ばれている赤間の見張塔のこと。(『大日本』を参照のこと)

3) 〈さんじゅうろく〉は「三十六」という意味、〈なだ〉は「海」という意味、〈ゆくゆく〉は「将来には、しばらくすれば」という意味、〈つちうたう、つちうとう〉は「土に触れる」を意味する表現〈つちをうと〉の代わりで、〈つち〉は「地面、大地」という意味、〈うたう、うとう〉は、「打つ、突く」を意味する〈うち〉の未来形で、表現を洗練させたり強調させたりために、よく語に後置される。⁽¹⁴⁾〈ほし〉は「乾かす」という意味である。

4) 〈てんべん〉は、「天の徴」という意味であり、「地平線」を比喩している。〈わ、は〉は主語を示しており、〈しめて〉は「知らせる、知らしめる」を意味する〈しめり〉の過去分詞である。〈みる〉は「見る」という意味、〈じんせい〉は内海の西岸を形成している九州という島のことで、赤間海峡を通して入港してくる船は、西に現れる。この島の最古の名前は〈つくし〉と言って、おそらく「月」を表す〈つき〉または〈つく〉に由来している。また〈し〉は「死」を意味しており、それは月が西に沈んで命を落とすからである。この解釈は、「西の地方」を意味する後世の名前〈さいごく〉、ちなみにこの〈さい〉は「西」で〈こく〉は「国、地方」の意味であるが、それから「西の世界」を表す中国名の〈じんせい〉、この〈じん〉は「埃」を意味していて、比喩的には「世界」を、〈せい〉は「西」を表しているのだが、この両者は矛盾しないであろう。〈きうしう、くしう〉は同様に漢語の名称であり、九つの地方を表している。この〈きう、く〉は「九」という意味で、〈しう、しゅう〉は「地域」という意味、〈やま〉は「山」という意味である。

この詩を翻訳するにあたって、私は原文に一字一句従っている。括弧の中に日本語の隠喩が確認できるが、本来は詩の中だけに認められるものである。その解釈を、私はこの翻訳で再現していくことにする。

- 1) 海を渡って(長い風波を切り裂いて)帆船が帰航する。
- 2) 碧緑の海岸の(斜めに長く伸びた線に)赤馬の見張塔が現れる。
- 3) 長い船旅(三十六の海)が終わりに近づいてくる。(まもなく乾くだろう)
- 4) 地平線に(天の徴として)最初に君がみるのは(現れたと思うのが)九州の山々。

7-3. 日本の偉大な詩人〈頼山陽〉

学識あるこの詩の作者〈頼山陽⁽¹⁵⁾〉は、近代日本で最も著名な歴史家である。〈頼山陽〉の執筆した本は、この国に大きな変革の道を開き、幕府崩壊と〈帝〉の支配権復活の足掛かりとなった。それだけに彼の作品の該当箇所を思い出すのは、当然のことであろう。

1827年、二十年の年月を経て、〈頼山陽〉は『日本外史』(日本外の歴史、または戦争史)(*)を上梓した。そこには平、源、北条、足利、徳川一族の歴史が綴られていて、各一族が次第に〈帝〉の権力を失墜させ、支配権を我が物にしていった様子が描かれている。〈頼山陽〉がこの本で説明しようとしたのは、法にかなったこの国の真の支配者は〈帝〉だけであるということ、さらに〈將軍〉の権力とほぼ独裁的な地位は、違法な王位篡奪によるものだということである。〈頼山陽〉の歴史著述の何冊かは、江戸の検閲によって出版前に幾度となく差し止められている。それと同様のことが、古典的歴史作品『大日本史』(日本の歴史)(**)の完成時にも起こった。同様の方向性を主張している本が、徳川將軍家の親戚としてある程度自由な意見陳述を許されていた〈水戸〉の第二代王子(西暦1622-1700年、皇紀2282-2360年)によって執筆されていたのであるが、本人の没後十五年目にして完成を見た。二百四十五巻からなる漢文体のその本は、無数の写しが

写本として出回ってきたが、1851年にようやく出版されたのである。⁽¹⁶⁾

(*)『日本外史』の〈につぽん〉は「日本」という意味。〈がい〉は「他国の、外国の」という意味で、〈し〉は「歴史」という意味である。総じて漢語である。
(**)『大日本史』の〈だい〉は「大きい」という意味で、〈だいにっぽん〉は日本の公式名称である。「偉大な日本」または「日本島国連合国」という意味をもつ。

7-4. 〈歌〉

2) 叙事詩である〈歌〉^{うた}（その漢字は、管楽器の演奏の卓越性を意味している）は、詩の真の日本的な形式である。古典的で純粹な〈歌〉は、中国起源の言葉や合成語をすべて排除して、新しい表現よりも古い〈大和言葉〉の古めかしい表現を優先して使用することを好んでいる。

〈歌〉の題材として扱われているのは、神話的で牧歌的な叙事詩、歌曲、空想であり、そこには主に自然の美しさと変化、人間の抑えがたい情熱と運命が描写されている。たびたび叙情豊かな描写となる。

〈歌〉には脚韻も頭韻もないが、音の脱落も絶対に許されない。しかし節度を持てば、各句の文字数を調整するために、一字か二字を特別に挿入することが許される。しかし許されているのは、叫ぶときのような意味のない語や文字に限られ、その言葉は、「クッションの語」を意味する〈枕詞〉(*)と呼ばれている。すなわち切り替えや支えとなる言葉であって、それは詩の部分ではなく、各句を支えるもの(クッション)とみなされているのである。日本人には一つの長い音節として発音されるが、実際には二つの音声記号で書かれている二重母音は、詩の構造に必要とされた場合において、二文字としてみなされる。

〈歌〉の構造は独特である。通常は句に分けられていて、句ごとに題材の思考は切り離さなければいけない。どの句も二つの部分から成り立っている。すなわち上昇する韻律の〈上の句〉と、下降する、沈む(**)韻

律の〈下の句〉からであり、それは朗読時の声の上げ下げにも一致している

〈上の句〉は三句から成り立っていて、一句目と三句目は五字、二行目は七字である。そして〈下の句〉は七字が二句である。従って〈歌〉の句は、三十一字から成る。〈上の句〉と〈下の句〉それぞれに〈句〉をまとめて、二行の配列で書かれることもある。その場合は、〈上の句〉が十七字、〈下の句〉が十四字となる。このようにして〈歌〉は古典作品にも収められており、〈上の句〉と〈下の句〉で一種のディスティコン⁽¹⁷⁾を形成している。〈上の句〉と〈下の句〉はときに一句として集められてしまうこともあるが、通常は五句に分けられている。

〈歌〉においても、日本語の韻律一般においても、音節の長さや休止は考慮されていない。とにかく各行に正しい文字数が必要なだけである。つまり〈歌〉の韻律は、このように形成されている。⁽¹⁸⁾

1. _ _ _ _ _	}	〈上の句〉
2. _ _ _ _ _ _ _		
3. _ _ _ _ _		
4. _ _ _ _ _ _ _	}	〈下の句〉
5. _ _ _ _ _ _ _		

(*) 〈枕詞〉の〈まくら〉とは、枕クッションの代わりに利用されている「頭部の支え」のこと。〈ことば〉は「単語」という意味である。

(**) 〈上の句〉と〈下の句〉のうち、〈かみ〉とは「上、上のもの」という意味、〈の〉は属格の助詞で、〈く〉は「詩行」という意味。〈しも〉は「下、下のもの」という意味である。

7-5. 〈阿倍仲麻呂〉

例として、歌人〈阿倍仲麻呂〉の古典的な〈歌〉を引き合いにしたい。

昔のドイツにもあった宵の明星の恋のように、彼の詩には故郷をしのんだ表現が用いられている。〈安倍〉は西暦716年(皇紀1376年)、中国から日本へ帰国する途中に嵐に遭遇して、乗っていた船が中国の海岸に座礁してしまった。この詩人は命こそ救われたものの、祖国を目にすることは二度とできないまま、異国で亡くなってしまった。〈安倍〉が浜辺で海を眺めていたとき、浮かんでいた月の壮麗さに心を打たれて、故郷の山を想い、このような詩を詠んだ。

- | | | |
|--------------|---|-------|
| 1. 天の原 | } | 〈上の句〉 |
| 2. ふりさけ見れば | | |
| 3. 春日なる | | |
| 4. 三笠の山に | } | 〈下の句〉 |
| 5. 出でし月かも(*) | | |

(*)ピラミッド型の〈三笠〉は、〈大和〉地方、すなわち奈良の東方に連なる山岳の中に堂々とそびえている。その山裾は、詩人の故郷〈春日〉〈かすが〉にまで及んでいる。

1) 〈天の原〉とは「天の草原」という意味で、すなわち「地平線」のこと。〈あま〉は「天」という意味、〈はら〉は「草原」という意味。または、山の草原、平原、湿原。

2) 〈ふりさけ見れば〉は、この有名な歌によって発展した状況語。その正しい意味を、翻訳全体で再現するのは困難だが、それぞれの言葉を解釈することで明らかになるだろう。〈ふり〉は、例えば剣などを「少し揺り動かす」こと、〈さけ〉は「開く」を意味する〈さき〉からきていて、「開いている」こと。〈みれば〉は、「見る」を意味する〈みる〉の仮定形。

3) 〈春日〉は、〈帝〉の古い宮廷がある〈奈良〉近郊にある、天皇の領土〈大和〉の小さな町のこと。〈なる〉(もしくは〈うち〉)は、「～中に、内部に、自宅で」という意味を持ち、合成語で「内密で、二人きりで」を意味する〈ない〉と同じ字が用いられる。

4) 〈三笠〉は、〈奈良〉連峰の最高峰。〔日本人の暦と祭り〕の章で、〈奈良〉を参照のこと) 〈やま〉は「山」という意味である。

5) 〈出でし〉は、「あがる」を意味する〈いでる〉または〈いづる〉からきているが、これは「太陽」と「月」を意味する〈日〉と〈月〉だけに用いられている。

原文に一語一句正確に、日本語の韻律を維持しつつ、文字数に正しく従って、この〈歌〉をドイツ語訳すれば、このようになるだろう。

1. 天の平原が
2. 私の目の前で明るく燃え上がっているときには
3. 春日にもまた
4. 三笠山にある我が故郷よ
5. 輝いた月が昇っていることだろう

7-6. 〈歌〉の神話적起源

『和漢三才図会』(天, 地, 人という神に由来する三つの力を描いた十六巻の図解)によれば、神々の最初の夫婦は、歌の創造神である〈イザナミ〉と〈イザナギ〉であるという。また他の神話によれば、最初の文学作品はこの夫婦の息子にあたる月神〈スサノミコト〉のものと伝えられている。その言葉は保たれていたが、意味解釈は失われてしまった。半神〈アジキタキヒコノカミ〉(*)の妻が、後に歌の形式を改良して、一定の韻律に整えたという。

(*)この国民的神〈しん, かみ〉の古い〈大和〉名の解釈は失われているものもあり、定かでない。このように疑わしい場合、私は追及を試みることはしない。ここに登場する最初の神夫婦の名前も、〈あじきたき〉という言葉も同様である。⁽¹⁹⁾〈ひこ〉は「曾曾孫」という意味。〈神〉に関する詳細は、関連

個所で紹介している。

7-7.「嘆き悲しむ未亡人」

伝承によれば、英雄の息子である第十二代〈帝〉の〈景行天皇〉（西暦71-130年，皇紀731-790年），すなわち〈大和武^{やまとだけ}〉が三十一字の〈歌〉韻律を発明したと伝えられている。また他の記述によれば，現行の歌の形式と句の分け方は，ある女流歌人によって導入されたという。私には残念ながらその名前が伝えられなかったのであるが，次に紹介する夫に先立たれた妻の癒されない悲しみを表現している〈歌〉が，最初の例だということだ。この歌は同時に，純粋な〈大和〉言葉の例でもある。

1. 三輪川の
2. 清き流れに
3. すすぎてし
4. 衣の袖を
5. 又はけがさし⁽²⁰⁾(*)

1. 三輪川の
2. 水晶のように澄んだ川の流れて
3. (私の衣装を)私は洗った
4. しかし私の上着の袖からは
5. ああ，(涙で)再び雫が落ちた(**)

〈上の句〉の言葉からは，絶望の悲しみのイメージが伝わってくる。心痛で我を失った日本人女性があまりにも涙を流し続けたために，衣の袖が涙で濡れてしまい，袖を絞らなければならない。

(*) 1) 〈みな〉はおそらく重要でない川の名前であり，私が問い合わせた日

本人自身もこの川については知らなかった。〈かわ〉は「川」という意味である。

2) 〈きよき〉は「純粋な、澄んだ」という意味で、〈流れ〉は「大河、川」という意味、〈に〉は「～の場所で」という意味である。

3) 〈すすぎて〉は「洗う、きれいにする」を意味する〈すすぎ〉の過去形。〈し〉は重要な助詞で、古い古典詩で〈枕詞〉に使用されるのみである。

4) 〈ころも〉は、仏教僧の上着のことで、この詩においては普段着を指す。〈そで〉は「袖」という意味で、〈を〉は他動詞の目的格を示している。

5) 〈また〉は「再び」という意味、〈は〉は感嘆詞であり、ここでは〈枕詞〉として用いられている。〈けがさし〉は「しみがついた、汚れた」を意味する〈けがし〉の代わりである。

(**)上記の歌を一語一句言葉に忠実に、日本語の詩の字数を保持して翻訳した。括弧の中の言葉は意味内容を理解するためのもので、日本語表示においては自明のものである。

7-8.〈歌〉文学の一般教育への影響、即興詩と歌合

完結した字数をもつ〈歌〉の形式は、〈小唄〉または漢語名で〈短歌〉と呼ばれている。〈小唄〉は非常に愛されていて、〈歌道者^{かどうしゃ}〉ないし〈歌詠^{うたよみ}み〉と呼ばれる歌人によって、ほぼ一般には詩の形式で、または粹な即興詩として歌われている。(*)この詩は壁に掛ける〈額物^{がくもの}〉、〈屏風〉(**)という衝立、置物、扇、化粧道具の上に、描写内容の趣旨や文字配列に合わせて、五句またはデISTIコンで、直線であったり曲線になったりしながら書かれているのをよく目にする。古い古典〈歌〉を暗唱するだけでなく、ちょっとした即興でつくることが、その訓練となっている。このような掘り出し物の詩にまつわる逸話は歴史上に数多く残っていて、民衆の口伝として今なお生きている。先述の『伊勢物語』の作者である〈伊勢大輔〉は、〈帝〉の宮廷の〈尚侍^{ないし}〉(***)であった。ある日、〈帝〉が宮廷で、彼女に見事な桜の枝を手渡した。それは〈帝〉が奈良から持ち帰った枝で、それで〈歌〉を詠むようにとの願いが込められていた。彼女が詠んだ優雅な詩の生命力に満ちた秀逸な発想は、宮廷に集められた廷臣

の称賛を呼び、この〈歌〉は今なおこの詩の至宝としてみなされている。⁽²¹⁾

古典の〈歌〉は、常に日常に存在していた。一般にもよく知られ、民衆の教育や精神生活と密接に絡んでいたために、詩の中の言い回しや比喩に、他にはない言葉や隠喩があれば、それは聴衆の記憶に留められた。ここで名を挙げられるのが〈清少納言〉、すなわち〈清原元輔^{きよはらのもとすけ}〉の娘であるとともに〈尚侍〉であり、祖国と中国の文学に精通し、少女時代から今なお忘れられることのない数多くの〈歌〉を詠んできた女流詩人である。大雪が降った数日後、天皇は廷臣と貴族女性とともに食堂にいた。天皇は突然、おまえたちは〈香炉峰^{くろうほう}〉の雪について何か知っているか、と問いかけた。そこにいる者の誰もが、この言葉の解釈を知らなかった。しかし〈清少納言〉は、広間の扉の御簾をあげて、白い冬服をまとって輝く山の景色を、無言で指し示した。〈清少納言〉だけが、ある古典の〈歌〉の隠喩表現を理解していたのである。その〈下の句〉は以下のように続く。

〈香炉峰〉の雪をご覧ください。

それは御簾に隠れてございます。⁽²²⁾

〈帝〉の問いかけへの返答である。満場一致で、彼女には祝いの品が与えられることになった。それは天皇自らの手で譲渡されたのである。

歌合と歌会は、天皇の宮廷で好まれた気晴らしのひとつである。それには〈帝〉自身も参加して、与えられた題材に符合した優秀な〈歌〉には、賞品が授与されたのであった。こうして成立した詩の多くが、古い詩の選集の中に今なお生き続けているのである。

(*) 〈小唄〉、〈短歌〉について。〈こ〉は日本語で「小さい、短い」という意味、〈たん〉は漢語で「短い」という意味。〈か〉は漢語で「詩」という意味であり、〈うた〉は「文芸」という意味である。〈歌道者〉の〈かどう〉は「詩作」という意味であり、〈どう〉は「道」という意味、〈しゃ〉は「人」という意味

である。〈歌詠み〉の〈よみ〉は「読む」ことである。

(**) 〈額物〉の〈がく〉は、絵画作品や碑文をはりつけた板で、家の中では飾りとして、寺院では奉獻物や奉納画として掛けられている。〈もの〉は「物」という意味である。〈額物〉の〈がく〉は、約五十センチ幅で、任意の長さの絹製または紙製の巻物に描かれている。西洋の壁かけ地図のように広げられて、その上下には木の棒が取り付けられる。有名な〈歌〉や仏教の教訓がよくみられるが、〈歌〉は〈ひらがな〉ないし漢字の〈草字〉で(〈そう、さう〉は漢語、日本語では〈くさ〉、「草」を意味する、〈じ〉は「字体」のことである)、教訓は古典中国の漢文で書かれている。状況に応じて、祝祭期間に幾度となく交換される。(『忠臣蔵』の第七章を参照のこと)。〈屏風〉は、私たちが「スペインの壁」と呼んでいるもので、日本人にとっては欠かすことのできない家具である。

(***) 〈内侍〉とは、天皇の宮廷に勤める女性のこと。第一巻の『忠臣蔵』を参照のこと。

7-9. 文学のゲーム

一般に知られている古典の〈歌〉に、〈百人一種がるた〉(*)という優美なゲームがある。百人の詩人の〈歌〉という意味を持つ二百枚からなるカードゲームで、非常に有名な古い古典〈歌〉の〈上の句〉が百枚に、〈下の句〉が残り百枚に書かれている。カードは常に参加者の任意の数だけ配られて、各人が少額の賭金をかける。最初の人が手持ちのカードの詩を読み上げ、詩の後半を持っている人がその後続けて詩を読む。迷えば、罰金を支払う。読み終わったカードは、終了したカードとして横に寄せられる。手持ちのカードをすべて終えた人たちが、賭金を分け合う。〈歌〉のカードをまだ手元に持っている人は、負けである。

類似の文学ゲームとして、古い詩と新しい詩のゲームを意味する〈古今がるた〉(*)がある。さらに〈源〉一族の名を持つ〈源氏がるた〉と〈詩がるた〉がある。上述の〈歌〉ゲームと同じようにして遊ばれるのであるが、このゲームに参加できるのは、中国古典文学、日本文学、カードに書

かれている詩の古典漢字に、完全に精通している人のみである。それゆえにこのゲームの参加者には、高い教養レベルと極めて熟練した記憶力が必要条件とされているのである。

これに関連した子供のゲームについて、さらに言及しよう。アルファベットゲームやことわざゲームに相当する〈いろはがるた〉である。カードの半分に、〈いろは〉文字のいずれかで始まる格言が書かれていて、残りの半分のカードにはこの格言に関連する挿絵が描かれている。子供たちは輪になって座り、その中から選ばれた読み手が挿絵カードを分散させて、順番に格言を読み上げていく。他の参加者たちは該当する絵を払いのける。上述のゲームのように、全てのカードを最初に終えた人が勝利者である。最後までカードを持っている敗者が少年であれば、その少年の顔は墨で悪戯され、少女であれば、紙屑や藁の束が頭髮の中に入れられる。

(*) 〈百人一種がるた〉の〈ひゃく〉は「百」という意味、〈にん〉は「人間」という意味で、ここでは「詩人」を指している。〈いつ〉は「一」という意味で(合成語のときだけ)、〈し〉は「詩」すなわち〈歌〉のことである。〈かるた〉は、ドイツ語のKarteを日本語の音声に置き換えた言葉であるが、rはruと表現されている。つまりドイツ語では短い語末音teが、日本語では長く発音されるtaとして置き換えられているのである。日本語の中で、私たちはこれと類似した方法で置き換えられた単語をいくつか目にしてきた。あるときはオランダ人に、あるときはポルトガル人に導入され、近年では英国の起源をもつもの、日本人がこれまで知らなくて、自分たちの言語に該当の名称がない外国産のものは、このように名づけられてきたのだ。例えば〈ブリキ〉は、ドイツ語の「ブレッヒ(Blech)」であるが、〈いろは〉には欠けていたが、Riに置き換えられて表現されたのである。〈かすてら〉は、「カステイーリヤ(Kastilien)」のことであり、その地方のケーキのような食物である。〈パン〉は、「ブロート(Brot)」のことであり、〈ボタン〉は、英語のbuttonである、等。

(*) 〈古今〉は「古く、近代的」という意味で、〈こ〉は「古い」という意味、〈こん〉は「今」という意味である。

7－10.〈歌〉の隠喩が持つ二重の意味、例として「子を奪われた母の嘆き」

〈歌〉は多くの隠喩、象徴、言葉遊びを含んでいるため、二重解釈がなされることがしばしばある。

次の古典の〈歌〉は、母親が一人息子の死を嘆いている歌であるが、隠喩を含む詩の二重の読み方の例として役に立つだろう。

1. 割れて吹く
2. 風子草切る
3. 花ともに
4. 散らで木の葉を
5. などか揺るらん⁽²³⁾(*)

言葉に忠実に、この〈歌〉を翻訳した。

1. 暴風よ、私のか弱い
2. 花を、散らし、吹き飛ばして、
3. 君は、野へと、おいやってしまった
4. どうして、葉を、君は巻き散らすのだ
5. やめて、木だけをいたわるのは

この歌に含まれている言葉の隠喩を解釈していくとすれば、まずは風を表す〈かぜ〉は死の隠喩表現である。そして〈こ〉は若さや子供の意味で、〈はな〉は花や若い花を意味しているが、また同時に幼い子供を隠喩している。さらに〈そう〉は草という意味であるが、墓の隠喩表現であり（「波打つ草」は、これまで多く用いられてきた墓の婉曲表現である。『忠臣蔵』第十章を参照のこと）そして〈このは〉は、木の葉を意味しているが、母親の隠喩表現である。

1. 私のか弱い子供を
2. 君が，ああ，死が滅ぼして
3. 墓へとおいやってしまった
4. なぜ母のことも同じようにしないのか
5. なぜ私だけをいたわるのか

(*)〈われて〉は、「割れる，裂ける」を意味する〈われ〉の過去分詞。〈ふく〉は「(風が)吹く」という意味である。

2)〈かぜ〉は日本語で，〈ふう〉は漢語。〈こ〉は「子供，若い」という意味である。〈そう〉は漢語で，〈くさ〉は日本語，意味は「草」である。〈う〉は「中へ，中に，間に」を意味する〈うち〉の代わりで，〈きる〉は「切る，分ける」を意味する〈きり〉の終止形である。

3)〈はな〉は「花，開花」という意味，〈ともに〉は「同時に，相互に」という意味である。

4)〈ちらで〉は「まき散らす」を意味する〈ちらし〉または〈ちらす〉の否定形の分詞。〈こ〉は「木」という意味，〈の〉は属格の助詞，〈は〉は「葉，木の葉」という意味，〈を〉は目的格の助詞。

5)〈など〉は「なぜ」という意味で，〈など〉の古い形，〈か〉は疑問につく助詞，〈ゆるらん〉は「揺らす，あちこちに弾みをつけて振る」を意味する〈ゆり〉の終止形，変化しない〈てにをは〉助詞の〈らん〉はわずかな疑いを表現している。

7-11. 一万枚の葉〈万葉集〉

日本の詩で最古の完全な詩集は『万葉集』(*)である。これは「一万の葉」を表しており，九世紀初めに由来する選集である。しかしそれより古い時代の詩が多く収められていることに疑いはない。この選集には漢語の造語ではなく，古い〈大和〉言葉と形式に富んだ完全に純粹なる〈歌〉が含まれている。『万葉集』の最新版の一部が，〈京都〉で1805年に二十巻本として上梓された。⁽²⁴⁾古い〈大和〉アルファベットに音声的に当てはめられ

た漢字と、その漢字には真の意味〈こへ〉が書かれていて、縦列の右横には〈片仮名〉で訳が添えられてある。『万葉集』は、どの〈歌道者〉にとっても古典的模範として現代に伝えられている。そこに集められている詩の作者は様々で、実権を握っている複数の〈帝〉や〈法王〉、〈公家〉、〈内侍〉、その他高貴な生まれの女性、僧侶、僧院に引退した戦争の英雄や地位の高い男性などがいる。(**)詩の多くは一句か二句からなる〈小唄〉であり、長い詩同様に、絵と言葉遊びに富んでいる。二句の作品の多くは、句と対句で書かれている。大部分の〈歌〉は雰囲気伝える叙述であり、美の影響や自然の変化によって、感覚や感情、沈思がどのようにかき立てられたのかを描写し、風景や牧歌的な状況を優美な形式で叙述している。日本の国民劇同様に、日本人の内面にある深い自然感覚に、詩や教養芸術で表現を与えているのである。この詩の中にはほんの少数ではあるが、戦争を賛美し、憎悪や報復にあふれ、復讐を最も神聖な義務としたきわめて好戦的な民族の詩が含まれているのは、確かに驚きである。『万葉集』に収められている詩の大部分が成立したのは、天皇の宮廷内でかつて試みられていた歌合のおかげである。

(*)『万葉集』は中国由来の語の合成語で、〈まん〉は「一万」という意味、〈よう〉は「葉」という意味、〈しゅ〉は「集合、選集」という意味である。

(**)〈法王〉は、退位後の〈帝〉の称号である。退位後に僧侶のように頭髪を手入れして、僧院に引退するのであるが、これは日本史にはよく登場する出来事である。そのような二人の〈法王〉が退位後しばらくして再登場し、再び支配の実権を握ったとき、これまでとは違う名前を名乗った。それ以来、それらの〈帝〉(両者ともに女性だった)は様々な名前で引用されるようになった。1874年に東京で出版された公式目録『日本略史』(〈りゃく〉は「省略、抜粋」という意味、〈し〉は「歴史」という意味)には、121人の天皇が挙げられているが、この数よりも実際の天皇の数は少ないのである。多くの軍司令官、政治家、高位貴族もまた僧院の静けさのなかで、人生の最期を締めくくっている。

7-12. 長い歌〈歌連歌〉

〈歌〉の第二の形式は、〈歌連歌〉、〈連歌〉、または長い〈歌〉を意味する〈長歌〉(*)と呼ばれている。詩の構造としては、〈小唄〉と些細な違いしかない。交互に入れかわる五字ないし七字の詩からなり、どちらも締めめの句は五字で終わっている。詩は任意の行数でいいのだが、詩から詩に至る間に、先のアイデアを考えておかなければならない。そうすることで、次に続く詩が常に先の詩に関連づけられるからである。あるいは少なくとも先の詩にあった言葉を通じて、精神的関連性を保つことができる。思考や材料がなくなると、五字と七字の句の繰り返しは、二行の七字からなる〈下の句〉で締めくくられる。長い詩は、句数が百や千になるまで続けられることもあった。前者は〈百韻〉(**)，後者は〈千句〉(***)と呼ばれている。〈小唄〉の場合と同様に、音が脱落することは許されないが、おそらく〈枕詞〉は許されている。

〈連歌〉は、詩の遊びの名称でもあり、仲間の一人が〈上の句〉を即興でつくると、他の一人が〈下の句〉をつくらなければいけない。

(*) 〈連歌〉は、「列に並ぶ、つながる、続く」を意味する〈つらなる〉から派生している。それゆえに〈歌連歌〉は「連続した、つながった詩」を意味する。〈長歌〉の〈ちょう〉は「長い」という意味であり、〈か〉は「歌」という意味である。

(**) 〈百韻〉の〈ひゃく〉は「百」という意味で、〈いん〉は「詩の語末音、脚韻」という意味である。

(***) 〈千句〉の〈せん〉は「千」という意味であり、〈く〉は「詩」という意味である。

7-13. 〈歌〉作品の様々なヴァリエーション

最後に、読み方や題材で〈歌〉作品とは区別されているヴァリエーションをいくつか思い出してみよう。その大多数に関しては、人づてに聞いた

ことだけを報告するのであって、私の解釈と記述の正確性に責任を負うことはできない。それゆえに事実と異なった細かい点があるかもしれないが、読者諸君はその思い違いをどうか良しとしてほしい。この短編を完全なものとするために、私は気がすすまないながら、このヴァリエーションを言及しないでおくこともできたのだ。

〈本歌〉^{ほんか}(⁽²⁵⁾*)は、三十一字の〈歌〉韻律で書かれる詩であり、言葉は順番に従っているが、様々な解釈で読まれることができる。

〈贈答歌〉^{ぞうとうか}(**)には質問が含まれている。この歌を完成させるためには第二の詩が必要で、最初の詩に関連している語の順に答えを返していく。

これと類似しているのが、〈再度歌〉^{さいどか}(***)であり、質問と答えの句頭と句尾の語か文字が同義でなければいけない。

それに対して〈思い返し〉(****)は、質問と答えで一語か一字を変えなければいけない。言葉の選択は任意だが、任意の単語を変化させるためには、技巧が必要である。

〈狂歌〉^{きょうか}(*****)は、滑稽で機知に富んだ内容を含む〈歌〉である。

〈折句〉^{おりく}(*****)は、句頭の字を集める即興句で、常に五句の〈歌〉韻律に従って、五七五七七の字数で交互に書かれなければならない。しかし各句の句頭の語、文字、漢字は、前もって決められている。

韻文化された言葉遊びでもあり、格言でもある〈俳諧〉は、〈歌〉韻律の〈上の句〉だけで成立している。通常は、虚構の名称^{はいみょう}〈俳名〉(*****)で署名される。

これと同じ字数で韻律配列なのが、冠婚葬祭時の小さな詩^{ほっく}〈発句〉(*****)である。的を射た表現の言葉遊びだけではほぼ成り立っている点に、その功績がみられる。

しかし最後に挙げたこれらの詩のヴァリエーションは、どれも多かれ少なかれ詩の遊びにすぎない。上品で深い感情のこもった〈小唄〉や、生き生きとした〈連歌〉を凌駕するほどのものではない。

(*)〈本歌〉の〈ほん〉は、「真の、本物の、決められた」という意味で、〈か〉は「詩」に相当する〈句〉と同じ意味である。

(**)〈贈答歌〉の〈ぞうとう〉は、「書簡を発送して返信する、文通」という意味である。

(***)〈再度歌〉の〈さいど〉ないし〈にど〉は、「二回」を意味する漢語で、〈さい、に〉は漢語、古い日本語でいえば〈ふたつ〉で「二」という意味、〈ど〉の漢字は「大気の温度、幾何学上の点や線、正しい節度」を意味しているが、ドイツ語のmalと同様に、漢数字に後置される。

(****)〈思い返し〉は、「何かを再び考える、熟考する」という意味であり、〈おもい〉は「よく考える」という意味で、〈かえし、かへし〉は「答える、返す、返済する、何かの報復をする」という意味である。

(*****)〈狂歌〉は「滑稽な歌」という意味で、〈きよ〉は「冗談、娯楽、楽しさ、おふざけ」という意味である。

(*****)〈折句〉は「アクロスティク」という意味であり、〈おり〉は「長くて細い物、例えば棒を折る、硬い物を曲げる」という意味、〈く〉は「詩の一節、一句」という意味である。

(*****)〈俳諧名〉は、十七字の〈俳諧〉詩が作られるときの仮名。〈みよう、みよ〉は「別名、仮名」という意味であり、例えば〈戒名〉といえ、死後につけられる死者の名前を指す。

(*****)〈発句〉の〈はつ〉は「始め、最初」という意味。この詩の種類は、〈歌〉韻律の〈上の句〉、すなわち最初の半分のみで成立している。

訳者注

- (1) 『源氏物語』の著者、執筆動機、執筆期間については諸説ある。
- (2) 原文にこの知識人の名前は〈しよめい〉とあり、石山寺の塔を建立したという記述内容から聖武天皇かと推察できるが、この人物の詳細は不明。
- (3) 伊勢大輔(989年頃-1060年頃)は一条天皇の中宮彰子に仕え、和泉式部や紫式部と親交を深めた女流歌人。
- (4) 大中臣輔親(954-1038年)は平安中期の歌人。伊勢神宮の祭主を務めた。藤原道長の五男教通に仕えた経験があり、娘の伊勢大輔が彰子に仕えるきっかけとなったと言われる。
- (5) 『伊勢物語』の作者は不明。在原業平ないし業平と関わりと持つ人物とい

う説が有力か。

- (6) 「そうし」を「しよし」と誤解したか。草子は軽い内容の本のこと。
- (7) 儒教の教書として重要とされる四書(論語、大学、中庸、孟子)と五經(易經、書經、詩經、礼記、春秋)を指す。
- (8) 「草紙」の解釈はユンカーの誤解で、娯楽的で廉価な本を指す。
- (9) 浄瑠璃姫は三河国矢作(やはぎ)に住む遊女の名。金売り吉次の供をした義経と契る。「やはぎ」を「やなぎばし」と誤解したか。「きいち」は吉次と混同したか。
- (10) 原文では「モミの伝承」とある。モミはマツ科モミ属の常緑針葉樹。
- (11) 詳細は不明。
- (12) 「ガゼル」は、中東から南アジアにかけて伝えられた恋愛提携叙事詩。「マカム」はアラブ音楽の旋律の型。
- (13) ここに紹介されている漢詩は、肥後熊本藩の儒者、伊形靈雨(1745-1787)が肥後藩の命で京都留学を終えた帰途、下関を越える際に読んだ詩「過赤馬關」に類似している。だが靈雨の原文と比較すると多少の相違があるので、以下に靈雨の漢詩を紹介しておく。「長風破浪一帆還 碧海遙回赤馬關 三十六灘行欲盡 天邊始見鎮西山」, その読みは, 「長風波を破って一帆還る 碧海遙かに回る赤馬が関 三十六灘行くゆく尽きんと欲す 天辺始めて見る鎮西の山」。
- (14) 「一艦」や「斜漣」をはじめとして、ユンカーの著者注には靈雨の漢詩には確認できない漢字の説明と独自の解釈が続く。「つちうと」の「つち」は「盡」を「塵」と誤解したか。そして「ほし」は「欲し」を「干し」と誤解したかと推測される。
- (15) 頼山陽(1781-1832年)は江戸後期の漢詩人であり歴史家。主著『日本外史』はベストセラーとなり、幕末の尊王攘夷運動に大きな影響を与えた。
- (16) 水戸藩による『大日本史』の編纂事業は、ユンカーの死後も続き、実際には1905年に完成を迎えている。全三九七巻、目録五巻。
- (17) 「ディスティコン」とは、オイディウスやプロペルティウスが採用した二行詩の形態。一行目が六歩格のヘクサメトロス、二行目が五歩格のパタメトロスとなる。
- (18) ここで使われている表現「カエスーラ」とは、詩行の中間の休止のこと。
- (19) イザナミとイザナギの間に生まれたのは、天照大神、月読、蛭児、その次がササノオとされている。アジキタキヒコノカミについては、詳細不明。
- (20) 原文には「みながわ」とあるが、この川は三輪川を指していると思われる。この歌が引用されているのは、鴨長明の『発心集』。そこでは三輪川で身を清めた玄敏僧侶が、僧侶として生きていく決意を歌った歌とされている。
- (21) 紫式部が受け取るはずだった八重桜を新参女房の伊勢大輔が受け取り、藤

原道長の薦めで詠んだ歌は百人一首に収められている。「いにしへの奈良の都の八重桜 今日九重に匂ひぬるかな」

- (22) 原文には「くろほの雪」とあるが、ここは『枕草紙』二九九段の「香炉峰の雪」の逸話を指していると思われる。ただし(一条)天皇とではなく、妃の中宮定子とのやりとりである。「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集りさぶらうに、少納言よ、香炉峰の雪、いかならむと、おほせらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。人々もさることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそ寄らざりつれ。なほ、この宮の人には、さべきなめりと言ふ」。
- (23) 出典、詳細ともに不明。
- (24) 1796-1812年にかけて刊行された加藤千蔭編『万葉集略解』か。原文に平仮名の訓を施し、賀茂真淵や本居宣長の解釈を中心とした注が加えられたこの注解書は、万葉集の入門書として流通した。
- (25) ここでは(狂歌、俳諧等に対する)本式の和歌を指しているのか。